

宗岡二中だより 11月号



令和6年11月1日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

「灯を消す方がよく見えることがある」

校長 伊藤大輔

夜空に輝く月を見ながら回想した話を紹介します。小学校5年生の頃でしょうか、山好きの叔父と叔母に連れられて、年末年始に雲取山登山をしました。最終日に20kmに及ぶ縦走路に挑戦しました。雪道。薄暮から闇が迫る時間帯。突然懐中電灯の電池が切れしました。あたりは真っ暗。不安な感情が一気に湧きおこりました。麓まで、まだ2時間はかかる場所です。がっくりうなだれる私に叔母が声をかけました。「今日はよく晴れている。満月の夜空だ。月の光を頼りに歩けば問題ないぞ。」不思議なことにしばらく歩いていると、闇の中にぼんやりと雪道が浮かび上がりました。今思えば、懐中電灯を頼りに歩いていたときよりも、注意深く目を凝らして歩いていたのです。へとへとになりつつも慎重に歩を進めました。奥多摩駅周辺の町の灯りを目にしたときに、じんわりとこみあげてきた得も言われぬ感情は今でも昨日のこのように思い出します。

臨床心理学者の河合隼雄氏の著作に、はからずもこんな話を見つけました。今月の標題はそのタイトルです。以下、引用します。(斜字体部分)

何人かの人が漁船で海釣りに出かけ、夢中になっているうちに、みるみる夕闇が迫り暗くなってしまった。あわてて帰りかけたが潮の流れが変わったのか混乱してしまって、方角がわからなくなり、そのうち暗闇になってしまい、都合の悪いことに月も出ない。必死になって灯をかかげて方角を知ろうとするが、見当がつかない。そのうち、一同のなかの知恵のある人が、灯を消せと言う。不思議に思いつつ気迫におされて消してしまうと、あたりは真の闇であ

る。しかし、目がだんだんとなれてくると、まったくの闇と思っていたのに、遠くの方に、浜の町の明かりのために、そちらの方が、ぼうーと明るく見えてきた。そこで帰るべき方角がわかり無事に帰ってきた。(河合隼雄著『こころの処方箋』より引用)

夜の雪山で愕然(がくぜん)とした私には、月も出ない暗闇の中、手近な灯を必死にかかげる漁師の気持ちがわかります。さらに灯を消すと目がなれてきて、見えていなかったものが見えてくる感覚もわかります。私たちに潜在する力は思いのほか大きいのです。しかし、私たちはそのことに気付いていないか、気付いていてもなお目をそむけようとしません。例えば、自分の進むべき方向がわからなくなると、目に見える手近なものに必死に頼ろうとします。ある人の助言を鵜呑みして、そのとおりにしたくなります。本やネットで(都合の)良いことが書いてあると、早速まねをしたくなります。自分が進むべき方向を決めきれずに右往左往します。漁師が灯を消したあとの闇に目をこらしたように、目の前に広がる闇を受け入れて、じっと見つめてみたら、進むべき方角を自力で定めることができるのに。

かくも偉そうに語る私自身も、ふらふらすることばかりです。問題を解決するために、さまざまな方の助言や、資料・書籍、先行の事例等を頼りすぎているか、問題の対象そのものと格闘し、自らをかけて判断し行動することから逃げてはいないか悩むことがあります。そういうときこそ、この話を思い起こしては、端(はな)から「見えるはずがない」と決め付ける弱い自分に待ったをかけています。